

アミーゴ会だより

2023年1月
通巻第53号
季刊2023-I

www.mex-jpn-amigo.org



発行人：河嶋正之
編集人：河嶋正之
事務局：吉野 隆

新年のご挨拶

メキシコ・日本アミーゴ会
会長 河嶋正之

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。会員の皆さまにおかれてはご家族おそろいでお健やかに初春をお迎えになられたこととお喜び申し上げます。本年が素晴らしい一年であることを祈念します。

メキシコ・日本アミーゴ会の活動は2022年も新型コロナ禍で大きな制約を受け、対面活動を全面自粛しました。恒例の総会・懇親会は開催を中止し、会報での報告による誌上総会に代えました。しかし、9月23～25日にはお台場で本会も後援する第21回フィエスタ・メヒカーナが3年ぶりに開催され、大勢の来場者を迎えました。また、第212回メキシコ独立記念日レセプションが9月13日に永田町の大使公邸であり会長が出席しました。他方、12月1日には都心での紅葉狩りとメキシコ料理を楽しむ会を企画しましたが感染拡大を前に中止しました。懇親ゴルフ会は12月13日に参加者が集合しましたが朝からの氷雨のため急遽中止し、今春の開催を目指すことにしました。メキシコ歴史・文化講演会は「大航海時代の日本：ロドリゴと三浦按針」を総合テーマに、オンライン／対面の連続講演を企画しています。しかし、「三浦按針（ウィリアム・アダムズ）」の英国在住日本人研究者の来日日程などがコロナ禍で確定できず現在は一旦保留しています。英語・蘭語・葡語などの史料解析による研究成果発表にご期待ください。



日墨友好事業を残念ながら中止せざるを得ませんでした。会員には「アミーゴ会メルマガ」で多様なメキシコ関連オンライン講演事業などを折に触れてご案内し、会報『アミーゴ会だより』を会員のご協力を得て年4回刊行し会員間の交流の拠り所とすることができました。会員諸兄姉のさらなる積極的な参画を期待します。また、在日メキシコ大使館はオンラインチャンネルで折々のメキシコ関連催事を届けてくれました。お陰さまで私たちは“メキシコの今”を日常の場で体験できました。

メキシコ・日本アミーゴ会はメキシコ大好き人間の親睦と両国の友好親善を目的とする、ボランティア活動団体です。今後ともメキシコ理解の深化に貢献できる草の根活動を心がけます。幹事会はメールやウェブ・対面会議を通じて意思疎通を重ね、HP改修を含めて困難な時代の効率的な運営と合理的な活動を模索しています。そんな折りに激務の事務局長を長年務められた笠井道彦さんが病気療養専念のため退任され、吉野隆幹事に後任をお引き受けいただきました。今後とも本会目的に沿った取り組みを展開できる基盤作りを進めます。会員の皆さまの更なるお知恵とお力添えを改めてお願いします。

事務局長交代のお知らせ
笠井道彦さんが1月16日付けで事務局長を退任され後任に吉野隆幹事が就任しました。 幹事会

2023年はメキシコと日本の外交関係樹立（日墨修好通商条約締結）135周年です。交流の深化拡大に向けた活動を模索したく存じます。他方、メキシコ経済は第6波の感染拡大下、インフレ高進と成長率低下に直面していますが、新しいニアショアリング（近隣地部品生産供給）の回帰進展に復調への期待が集まります。また、2024年6月の大統領選挙を前に各党の候補者選びに向けた政治の季節が始まります。

世界経済は物価と資源価格の上昇を背景に主要国の高金利政策の維持で更なる収縮が予期され、ロシアのウクライナ侵攻は“新しい冷戦（第3次大戦）”を惹起するリスクを孕みます。幸い2023年の干支は「癸卯（みずのと・う）」で、癸も卯も春を前に新生命が兆す時季を象徴すること。世界平和の新潮流が生まれ、人類の知恵が感染症を克復し、静穏な日々が早急に出来ることを期待します。（1月21日記）

＝ 目 次 ＝

1. 新年のご挨拶	アミーゴ会会長	河嶋正之	...1
2. 新年祝賀メッセージ	駐日メキシコ大使	メルバ・プリーア	...2
3. メキシコへの誘い：「ぶらりメキシコ一人旅 5-シリトラの英国人エドワード・ジェイムスの庭」	阿部修二		...3
4. 活動報告：「第21回 Fiesta Mexicana 2023 in お台場」	実行委員会委員長	三村秀次郎	...6
5. 私のメキシコ：「メキシコの著名 4-サッカー選手&ボクサー、空港名・紙幣に残る人名」	桜井悌司		...7
6. 本欄「おんじゅく日記」/柳沼孝一郎名誉教授講演会/映画：母の聖戦/報告：ニアショアリング進展/あとがき			...10

メキシコ・日本アミーゴ会に寄せる メルバ・プリーア大使新年祝賀メッセージ



RELACIONES EXTERIORES
SECRETARÍA DE RELACIONES EXTERIORES

MÉXICO
EMBAXADA EN JAPÓN

Mensaje de Año Nuevo de la Embajadora Melba Pría para la Asociación "Amigo-Kai"

Tokio, Japón, enero de 2023

Los Años Nuevos son momentos que nos hacen reflexionar en torno al pasado, al presente y al futuro. Acabamos de terminar un año en donde cumplimos algunas de nuestras metas y sueños, y lo mejor de todo, retomamos muchas de las actividades que se habían suspendido por la pandemia.

Sin duda, tras el confinamiento y la emergencia sanitaria internacional, nos hemos replanteado muchas cosas como sociedades, y también hemos podido revalorar a las personas que apreciamos y las actividades y eventos que celebrábamos con cotidianidad.

Es una alegría volver a trabajar con los miembros de Amigo-Kai para promover y gozar de la cultura mexicana y con entusiasmo recibo este 2023 sabiendo que pronto podremos reunirnos para realizar los festejos que cada año hacíamos conjuntamente.

Como Embajadora de México en Japón, quiero agradecer a los miembros de la Asociación Amigo-Kai por su cariño, esfuerzo y amistad hacia México y por ser un ejemplo de unión, apreciación mutua y fraternidad entre ambos pueblos.

Solo me queda desearles un próspero 2023 y que todos ustedes, y sus seres queridos, tengan un año lleno de éxitos, salud y cumplan todos los objetivos que se han propuesto.

Atentamente,
Melba Pría
Melba Pría
Embajadora

2-15-1, Nagata-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 〒100-0014
東京都千代田区千代田 2-15-1

@EmbamesJP @EmbamesJP EmbajadadeMexicoenJapon EmbamesJP



メルバ・プリーア大使

2023年1月 日本東京にて

新年を迎えるというのは過去を振り返り、現在・未来に思いを馳せるよい機会になります。私たちは自分たちの決めた目標や夢がいくつか実現したであろう1年を終え、その中でも何よりも喜ばしいことにパンデミックで中断されていた多くの活動を再開することが出来ました。

もちろん全世界での外出制限や衛生上の緊急事態を通して、私たちは社会で生

きていく上で多くのことを再考しなくてはいけませんでした。その一方日常的に行っていた周りの人に感謝しお祝いする活動やイベントの大切さを再認識致しました。

アミーゴ会の方々と再び協力しメキシコ文化を促進・享受することが出来る事を大変うれしく思います。私は2023年を迎えるにあたって、毎年協力し実現してきた一連の行事の為近いうちにお会い出来る事を熱意をもって歓迎致します。

私は、駐日メキシコ大使として、メキシコに対する友好と親愛の関係を長く温めて来られたアミーゴ会の皆様方に感謝の意と敬意をお伝えいたします。皆様方の存在は、両国の友好が存続する確固たる模範となっています。

皆さまと皆様の愛する方たちにとって2023年が繁栄し成功と健康に満ちた年を迎えることが出来るようお祈り申し上げますと共に皆様にとって実りある一年となるよう願っております。

メルバ・プリーア
大使

(メキシコ大使館訳)

ぶらりメキシコ人旅 —シリトラの英国人エドワード・ジェイムスの庭—

メキシコ・日本アミーゴ会 会員
写真家・ルポライター 阿部修二

はじめに

前回(第4回)、そして前々回(第3回)に紹介したケレタロ州ハルパンからバスで120号線を二時間ほど東に向かい、サン・ルイス・ポトシとの州境を越えてすぐ、シリトラという町に着く。今回はその町と、そこに不思議な庭園を造ったイギリス人エドワード・ジェイムスとその作品を紹介しようと思う。

シリトラ市は5万人を超える人口を抱えているが、市街地に住んでいるのは6,000人あまり。人口の半分以上はウステカ族と言われていて、スペイン語を話すと同時に日常的にウステカ語を話しているという。そのため、今もなお彼らの文化が色濃く残されている。

1537年にアウグスティヌス会の修道士が入植し、修道院を作った。その場所はゴルダ山脈の東斜面にあたる今日の町の中心である。前々回に紹介したハルパンでもそうだったが、ここシリトラも標高676mの山の尾根に住居が集中し街並みを形成している。それは好戦的なチチメカ族の攻撃を危惧してのことだった。1569年と1587年にチチメカ族に襲撃され、先の修道院が焼き払われたことでアウグスティヌス会はこの地を放棄している。その後、17世紀にドミニコ会が再建を試みるも成就することはかなわず、この町に修道会が根付いたのは、ハルパンで改宗に取り組んで成功したフランシスコ会のあのフニペロ・セッラ修道士と彼の仲間だった。

私が訪ねたのは2015年の10月30日。町は死者の祭りの準備中で、ソカロに市が立ち、死者の祭壇を飾る黄金色のマリーゴールドを売る露店で賑わいを見せていた。狭い修道院・教会前の広場では若者たちが祭りのステージ作りで忙しくしていた。

国道120号線を中心にした街並みは意外に短く、しかも狭く苦しい印象がぬぐえない。人口増加とともに、住居が400m下の谷にこぼれ落ちそうな田舎の町なのだが、この町を有名にしている隠れた観光スポットがここにはある。今回はそれを紹介しようと思う。



目抜き通り・120号線



シリトラ・尾根の町



死者の日:ステージ



マリーゴールド露店



死者の日祭壇



死者の日装飾

ラス・ポサスの庭園

町の中心から北西に下るつづら折りの道を4kmほど進むと、深い森の中にあるラス・ポサスの入り口に着く。タクシーを使えば15分ほどの道のりだが、私は路程の風景をカメラに収めようと徒歩で向かったために1時間ほどかかったが、亜熱帯の魅惑的な風景を目にすることができてそれは正解だった。

さて、「ポサ (poza)」とは淵という意味だが、その森には滝が2つほどあり、その落下地点に滝壺があるからそう名付けられたものと思う。元々はコーヒー農園だったというが、この滝のある風光明媚な土地を手にしたのは、イギリス人エドワード・ジェイムスという人物だった。

さて、エドワード・ジェイムスという人間・・・

エドワード・ジェイムス(1907-1984)は貴族階級の母エリザベス・エベリン・フォーブスと工場主の父ウィリアム・ドッジ・ジェイムスとの間にスコットランドで生まれている。彼のその後の人生の在り方からか、彼の代父、国王エドワード7世の子孫であったと噂されていた。彼は四人の子の中にたった一人の男児だったが、彼が5歳の時に父を亡くしたことで膨大な遺産を父ウィリアムから相続している。

少年期の彼は文学に能力を発揮し、14歳の時に最初の詩を書いたのだという。だが鬱病を抱えた困難な

少年期であったようだ。1926年にオックスフォード大学美術科に入学し、その同じ年に、最初の詩集を出版したという。だが、理由は分からないが1928年には大学を中退している。その翌年、母親が死去したことで、22歳の若者は家族のくびきから解かれると同時に、両親の財産を相続することになった。彼の人生の中で最初で最後の、ただ一度だけ勤めたのは、1930年に大英帝国の駐ローマ大使館の文化担当の名誉職のそれであったという。しかし7ヶ月後には彼は辞表を提出している。



Edward James の紹介パネル

彼の青春時代は、移り気、意志薄弱で何事も長続きしなかった。そのことを自覚していた彼は、それらから逃れる必要を感じて、ヨーロッパ各地に所有していた家を点々とし、流浪生活時代を過ごしていた。

だが、それはパリの知識人や芸術家集団の庇護者としての名声を手に入れるための準備期間だったよう

だ。そうしたアーティストの一人がジョージ・バランシン(1904-1983)という舞踏家だった。1933年のその舞踏家の公演では、その彼に資金援助をしている。

その後、エドワード・ジェームスはアルベルト・スキラが1933年に発刊した有名な美術誌ミノールに出資したことをきっかけにして、アンドレ・ブルトン、サルバドール・ダリ、マルセル・ドゥシャンを初めとする多くの作家や、ルネ・マグリットのようなシュールリアリズムの芸術家にすっかり魅了されることになる。この時以来、彼はシュールリアリズム作家を庇護する役割を演じ、特にルネ・マグリット(1898-1967)とサルバドール・ダリ(1904-1989)に入れ込み、そのダリとは1936年から38年半ばまでの彼の作品を引き受けて、半年ごとにお金を支払う契約をしていた。また1939年には彼はダリのニューヨーク万博に出品した突飛なインスタレーション『「ヴィーナスの夢」のなかの人魚』のプロジェクトに出資もしていた。

蘭の庭園からコンクリート舎の動物園に

第2次世界大戦に伴い、エドワード・ジェームスはニューヨークに移り住んでいる。それ以降米国内を点々として1944年にロスアンゼルスに辿り着いた。そこから彼はメキシコに旅に出ることになり、最初にモレーロス州クエルナバカを訪ねている。そこで精神分析医エリッヒ・フロムに出会い、彼とのメキシコ国内の旅は彼の創作の夢を揺さぶることになったのだという。

そして彼の魂に革命をもたらしたのは、メキシコ滞在中に出会った二人の人物だった。一人はレオノーラ・カリングトン。イギリス生まれのシュールリアリズムの画家で、彼は彼女から複数の作品を購入したのだという。そしてもう一人はプルウタルコ・ガステリウム。ヤキ族の血をひくメスティエソの写真家だった。彼はクエルナバカの電信局に勤めていた人物で、彼の運転するトラックに乗ってメキシコの旅を始めたのだ。ジェームスはその旅でサン・ルイス・ポトシ州のシリトラのラス・ポサスを知ることになる。彼は天からもたらされる美しい水流に魅了され、ウワステカ族の熱帯の芳潤な風景の虜になっていた。1947年、友人ガステリウムを通してその土地を取得している。

エドワード・ジェームスは当初、各地から取り寄せた珍しい蘭の庭園をこの地に造ろうとしたのだ。ところが1962年の冬に珍しくシリトラに大雪が降

り、蘭植物が全滅した。そのことでジェームスはその庭園を私設動物園に転換することを決断したのだという。そして、メキシコ中央市場で買いもとめた珍鳥や鹿、猫、へびのための住処をそこに建設しはじめたのだという。それが建築にのめり込んだ動機だった。

動物のための檻や囲いの建設は、ついに「コンクリートの庭園」という発想に到達したのだ。そうした庭園は人工物によって介在され、混成されたまがいものの自然の庭園なのだが、いわば、風景に取り込まれる建築物、コンクリート製の彫刻の集合体形成に向けて変換しはじめたのだ。

ジェームスは子供が使うノートいっぱい、溢れ出てくる着想をスケッチしていた。それでも、そうした計画を実現に結びつけたのは、大工の頭領ホセ・アギラルとの出会だった。彼はまさしく仕事の鬼で、ジェームスのスケッチを鉄筋と木型で具象化する仕事を大胆に、そして根気よくこなして、偉大な頭領の役を演じたのだという。

1962年から84年の間、ジェームスは、巨大なこの作品の建設に500万ドルをつぎ込んで、シリトラの土木職人40人に職を与えたのだという。彼の親友だったガステリウムの息子カコによれば、ジェームスはその経費をまかなうために彼が所有するシュールリアリズムの絵画作品の入札を行い、その工事費を捻出したのだそう。

未完成のシュールリアリズムの作品群

ラス・ポサスのエドワード・ジェームスの庭は、彫刻を合わせて36の小建築によって構成されている。

そうした構造物は、草花や樹木の間を蛇行するいくつかの山道、迷路沿いの空間に作られている。その場所

は彼の作品構想を具現するのにやっかいな地形で、大変な工事だったことが想像できる。エドワード・ジェームスが、シュールリアリズムに関わったのは、詩における言葉の抽象化追求だった。彼は、自然の植物の形にインスピレーションを受け、それを言葉にすることから出発している。しかし、シュールリアリズムの作家との接触で、ついには人間と外界、あるいは自然と超自然の境界を超えたシュールレアリスムの立体作品に到達したのだった。

ラス・ポサスの庭園は、そのシュールリアリズムの表現の一形式であり、不可解で意味のない空間であり、既存の環境作品と対立する1つの回廊として見る事ができる。ある空間の使用目的や機能はこれまでの習慣的な理解では得られない。つまりその空間はすでに存在理由を失っている。

例えばラス・ポサスの入り口にある建物の渦巻き状の階段は、その制作の意図がないまま、終わりのない天上に向かっている。我々は夢の中の空間に立たされることになる。彼の作品を耽美的とするのは偏見であると思う。ジェームスの作品は、建築の範疇に決して入らない。その庭園は彼の頭の中に構築されたテーマ

パークだと私は確信している。説明の付かない彼の作品は写真で見ていただくほかはない。タイトルが付いているものがあるようだが、後付の感があるのでここではその例を列挙するだけにする。「エル・シネ」「竹の宮殿」「マックス・エルンストに対する賞賛」「サンペドロとサンパブロの門」「石の7つのへび」。そして、モチーフは花芯、キノコ、花、葉っぱ、ステゴザウルスの背中に付いた棘、竹、インコのくちばしなどである。

ラス・ポサスの庭園は建築家の創造性から生まれたものでは決してなかった。苔むして、いつかは朽ちることがあっても、決して成長しないまがい物の植物を熱帯のこの地に残そうとしたのは、シュールリアリストのダリやマグリットに敬意を払い、庇護しつつ、彼らの非凡な才能に羨望し続けたエドワード・ジェームスのシリトラでの偉大な挑戦だったのだ。彼は1984年にイタリアのサン・レモで、彼自身の作品、すなわちラス・ポサスの庭の完成を待たずに77歳の生涯を閉じている。

(連載その5完)



～エドワード・ジェームスの庭の作品群～



阿部修二会員に「ぶらりメキシコ人旅」と題して、メキシコのあちこちを訪ね歩いたエッセイを連載していただきます。

第1回(2022年1月号):トラスカーラ 第2回(同4月号):ケタロ 第3回(同7月号):ハルバン&コンカ
第4回(同10月号):ランダ、ティラコ&タンコヨル 第5回(2023年1月号):シリトラのエドワード・ジェームス

阿部さんは2005年よりアミーゴ会会員。1947年岩手県花巻市生まれ。岩手大学工学部卒及び桑沢デザイン研究所ビジュアル・デザイン科卒。日本写真家協会元会員。メキシコ教会美術に惹かれ1986年より毎年渡墨。2005年以降4冊のメキシコ関係書籍を発行。最新作は『先住民のメキシコ—征服された人々の歴史を訪ねて』(2021年9月刊 明石書店)です。[写真転載不可]<編集部>



第21回フィエスタ・メヒカーナ 2022 in お台場 Tokyo

Fiesta Mexicana 御礼とご報告

21th in お台場 Tokyo 2022

日本ラテンアメリカ文化交流協会

会長 三村秀次郎

3年振りに「フィエスタ・メヒカーナ」が開催されました。お台場はオリンピック&パラリンピックの工事で至る所が以前とは変わりましたが、変わらないのは共催して下さる「東京臨海副都心まちづくり協議会」、後援して下さるメキシコ大使館や東京都港湾局、メキシコ・日本アミーゴ会、御宿町の方々、その他協賛・協力、そしていつもと同じようにお手伝いいただいた多くの皆様には本当に感謝申し上げます。出店して下さった沢山のレストランや民芸品店の皆様、それにステージで歌い踊ってくださったアーティストの皆さん、ありがとうございました。最終日はフェリックス・ゴンサレス・ララ将軍がカルメン・モレノメキシコ外務省副大臣への国旗授与で始まる「エル・グリート」。集まったメキシコ人のビバ・メヒコの歓声の中、メルバ・プリーア駐日メキシコ大使が独立の鐘を鳴らし国旗がふられの、メキシコ国歌斉唱もとても心にしみました。というのも私は昨年未から大病をして入院して、やっと動くことが出来る状態まで体調が戻ってきた、そんな中で見た「フィエスタ・メヒカーナ」だったので皆さんへの感謝がとても大きく感じられました。これからも「フィエスタ・メヒカーナ」が継続できるよう頑張りたいと思います。

太陽広場 メインステージ PLAZA del SOL



▲オープニングセレモニー



▲MEXICO 写真コンテスト入賞者表彰式



市場通り CALLE del MERCADO

ビールはもちろん、タコスやアサードも!!



▲エル・グリート



▲シルビアと踊ろう



▲マリアッチ



▲エビ・アミーゴ君 ▲Natalia Danae

メキシコの著名サッカー選手 & ボクサー & 空港名・紙幣に残る人名録

～その4～

メキシコ・日本アミーゴ会会員 桜井悌司
一般社団法人ラテンアメリカ協会常務理事

(7)メキシコの著名サッカー選手

メキシコもサッカーが盛んである。ブラジルやアルゼンチンほどのサッカー超大国ではないが、サッカー大国であることは間違いない。世界最大級のスタジアムである 87,000 人収容のアステカ・スタジアムもあるし、1986 年にはワールドカップ・メキシコ大会を実現させた。メキシコは、過去にワールドカップには、全 21 回中 16 回出場している。2012 年のロンドンオリンピックでは堂々金メダルに輝いた。以下 5 名を紹介する。

*アントニオ・カルバハル

Antonio Felix Carbajal Rodriguez

1929 年生まれ。GK。愛称は「La Tota」。レアル・クラブ・エスパニーヤ（メキシコ）→クラブ・レオン（メキシコ）に所属。メキシコ代表 1950 年～66 年、国際試合 48 戦 0 得点。FIFA ワールドカップの 50 年ブラジル大会から 66 年イングランド大会まで連続 5 回出場の記録を作った。55 出場者は、前述のメキシコのラファエル・マルケスとドイツのローター・マテウス、イタリアの GK のブッフオンのみ。

*ウーゴ・サンチェス

Hugo Sanchez Marquez

1958 年生まれ、1998 年引退。FW。愛称は「マニート」。UNAM→プーマス（メキシコ）→アトレティコ・デ・マドリ→レアル・マドリ→クラブ・アメリカ（メキシコ）→ラジョ・バジェカーノ（スペイン）等に所属。メキシコ代表 1977 年～91 年、国際試合 58 戦 29 得点。ワールドカップには 3 回出場、1980 年代後半からのレアル・マドリはブトラゲーニョやミチエルなどのスター選手を抱えたチームであったが、その中において中心選手であった。スペイン・リーグでの得点数は 234 ゴール、5 度の得点王。リーグ最優秀外国人選手賞 2（87 年、90 年）、メキシコ史上最高のストライカー。ゴール後の前方宙返りで有名。筆者はサンティアゴ・ベルナベウ・スタジアムで試合を見る機会があった。

*ホルヘ・カンボス

Jorge Campos Navarrete

1966 年生まれ。GK。UNAM→アトランテ（メキシコ）→ロサンゼルス・ギャラクシーアトランテ→プエブラ（メキシコ）等に所属。メキシコ代表 1991 年～2004 年、国際試合 130 戦 0 得点。3 回のワールドカップに出場。身長が 165 センチとか 168 センチと言う話もあり、小さな巨人という愛称を持つ。

*ルイス・エルナンデス

Luis Arturo Hernandez Carreon

1968 年生まれ。2006 年引退。FW。愛称は「El Matador」。クルス・アスル→モンテレイ→ボカ・ジュニアーズ→ロサンゼルス・ギャラクシークラブ・アメリカ等に所属。メキシコ代表 1995 年～2002 年、国際試合 85 戦 35 得点。ワールドカップには 2 回出場、98 年フランス大会では 4 得点。1997 年コパ・アメリカ得点王。

*ラファエル・マルケス

Rafael Marquez Alvarez

1979 年生まれ。DF。MF。愛称「アステカの皇帝」。アトラス（メキシコ）→モナコ→FC バルセロナ→ニューヨーク・レッドブルズ→クラブ・レオン等に所属。メキシコ代表 1997 年～2018 年、国際試合 147 戦 19 得点。FIFA ワールドカップには 5 回出場、2002 年と 2010 年はキャプテン。

(8)メキシコの著名ボクサー

メキシコは、世界のボクシング界で名ボクサーを輩出させた国として有名である。筆者のメキシコ駐在時代には、カルロス・サラテとアルフォンソ・サモラの両チャンピオンとの戦いには手に汗を握ったものだ。ボクシングは大変人気のあるスポーツで、米国でも大活躍している。下記 7 名を紹介する。

*ビセンテ・サルディバル

Vicente Saldívar

1943 年～85 年。40 戦 37 勝（うち KO26 回）、3 敗。1964 年、キューバのシュガー・ラモスに判定勝ちで WBA/WBC フェザー級王者になり、7 回防衛。日本の関光徳とは 2 回闘い、判定勝ち、TKO で勝利している。柴田国明とは、12 回終了棄権により、WBC フェザー級タイトルを失った。「メキシコの赤い鷹」という異名を持っている。世界ボクシングの殿堂入り。

*ルーベン・オリバーレス

Ruben Olivares

1947 年生まれ。104 戦 88 勝（うち 77KO）、13 敗、引き分け 3 回。1969 年、WBA/WBC 世界バンタム級

王者。2 度防衛するがその後は王者陥落と再度獲得を繰り返す。その後、WBA と WBC 世界フェザー級王者となり、2 階級制覇王者となる。1971 年には愛知県で金沢和良と防衛線を行い、「世紀の死闘」の末、KO で勝利した。1974 年には、WBA 世界フェザー級王者決定戦で、歌川善介を 7 回 KO で勝利し、2 階級制覇を成し遂げた。世界ボクシングの殿堂入り。

*カルロス・サラテ

Carlos Zárate

1951 年生まれ。70 戦 66 勝（うち KO63 回）、4 敗。デビュー戦から 23 戦全 KO 勝ち、引き分けをはさみ 39 戦まで全 KO 勝ち。1976 年 WBC 世界バンタム級王者、9 度防衛。76 年には、当時メキシコで人気を二

分していた WBA 世界バンタム級王者のアルフォンソ・サモラ（当時 29 戦 29 勝 29KO。世界ボクシングの殿堂入り）とノンタイトル戦で闘い KO 勝ちした。当時、メキシコ駐在であった私は、テレビで手に汗を握りながら観戦した。1978 年には WBC スーパーバンタム級王者のウルフレド・ゴメスと戦ったが、5RKO 負けを喫し、2 階級制覇を果たせなかった。世界ボクシングの殿堂入り。

***ルペ・ピントール**

Lupe Pintor

1955 年生まれ。72 戦 66 勝（うち KO42 回）、4 敗、引き分け 2 回。1979 年に、メキシコのカルロス・サラテに 15R 判定で勝利し、WBA バンタム級王者になり、8 回防衛。1982 年、プエルトリコのウルフレド・ゴメスに 14RTKO で敗れる。世界ボクシングの殿堂入り。

***ホセ・クエバス**

José Cuevas

1957 年生まれ。50 戦 35 勝（うち KO31 回）、15 敗。1976 年、アンヘル・エスパダに KO 勝ち、WBA 世界ウェルター級王者。初防衛戦は、日本の辻本章次で KO 勝ち、その後 11 回防衛。通称 PEPINO（胡瓜）、米コックのトーマス・ハーンズに KO 負けで王座を失う。世界ボクシングの殿堂入り。

***フリオ・セサル・チャベス**

Julio César Chávez

1962 年生まれ。116 戦 108 勝（うち KO87 回、6 敗、引き分け 2 回。元 WBC スーパーフェザー級王者（9 度防衛）、元 WBA・WBC 世界ライト級王者、元 WBC

スーパーライト級王者（12 回防衛）。ボクシング界のシーザー（El César del Boxeo）と呼ばれた。パナマのロベルト・ドゥラン、ニカラグアのアレックス・アルゲリョと並びラテンアメリカのボクサー界のスーパースター。米国のオスカル・デ・ラ・ホーヤには 2 回、KO、TKO で敗戦している。世界ボクシングの殿堂入り。

***サウル・アルバレス**

Saul Alvarez

1990 年生まれ。57 戦 54 勝（うち KO54 回）、1 敗、引き分け 2 回。現在最も注目されている現役ボクサーの 1 人。ニックネームはカネロ（シナモン）。現 WBA/WBC スーパーミドル級王者、4 階級制覇王者。元 WBA・WBC・WBO 世界スーパーウェルター級王者、IBF 世界ミドル級王者、WBO 世界ライトヘビー級王者。最も注目された試合は、2015 年のミゲール・コット（プエルトリコ）と対戦し、12 回判定勝ちで WBC 世界ミドル級王者となった試合である。また 2017 年、18 年には、世界最強と言われたカザフスタンのゲンナジー・ゴロウフキンと 2 回闘い、引き分け、判定勝ちを納め、WBA スーパーライト級王者、WBC 世界ライト級王者となった。彼の試合はペイ・パー・ビュー（有料放送）で放映されるが、視聴者が 100 万件を超える試合が 4 試合もあった。Forbes Japan 誌の 2021 年 9 月号によると、サウルは、2019 年には 9,200 万ドル稼いだと報じられている。

(9) 国際空港名に見るメキシコ人

インターネットで調べてみると、メキシコには、108 の空港があり、うち国内空港は 48、国際空港は 60 と、他のラテンアメリカの国々に比較して圧倒的に国際空港が多く、さすがの観光立国メキシコである。全空港のうち、人名のつく空港は 36 で 3 分の 1 を占める。ここでは 7 名を紹介する。

空港所在都市	空 港 名 “人名”
Mexico City	Aeropuerto Internacional de la Ciudad de México “Benito Juárez”
Cancún	Aeropuerto Internacional de Cancún “Benito Juárez”
Guadalajara	Aeropuerto Internacional de Guadalajara “Don Miguel Hidalgo y Costilla”
Monterrey	Aeropuerto Internacional de “General Mariano Escobedo”
Tijuana	Aeropuerto Internacional de Tijuana “General Abelardo L. Rodríguez”
Puerto Vallarta	Aeropuerto Internacional de “Licenciado Gustavo Díaz Ordaz”
Mérida	Aeropuerto Internacional de “Manuel Crescencio Rejón de Mérida”

***ベニート・ファレス Benito Juárez**

1806 年～72 年。メキシコ・シティの国際空港名になっている。先住民族から選ばれた最初の大統領。保守派と自由主義派との間で戦ったレフォルマ戦争における自由主義陣営の指導者。大統領在任中にフランスからの介入を受けるが、徹底抗戦を貫き共和制を復活させる。メキシコで最も尊敬されている人物の一人。彼の誕生日の 3 月 21 日は祝日。メキシコ・シティの人類学博物館の入り口に彼の有名な言葉「El respeto al derecho ajeno es la paz」（他人の権利を尊重することが平和につながる）が掲げられている。

***ミゲール・イダルゴ・イ・コスティージャ**

Miguel Hidalgo y Costilla

1753 年～1811 年。グアダハラハラ国際空港名になっている。メキシコ独立の父。聖ニコラス校で学び、1778 年同校で教鞭を取る。ヨーロッパの啓蒙思想に影響を

受ける。1808 年、ナポレオン軍のスペイン侵攻でスペインが弱体化する時期に、イグナシオ・アジェンデなどと共に独立の蜂起を決行する。1810 年 9 月 16 日の深夜に有名な「ドローレスの叫び」をあげ独立戦争が始まる。イダルゴはスペイン軍に捕まり処刑される。今でも独立記念日には、ソカロ広場の大統領宮殿で大統領自ら「ドローレスの叫び」を復唱することになっている。在外の大使館でも同様。

***ヘネラル・マリアノ・エスコベド**

General Mariano Escobedo

1826 年～1902 年。メキシコの軍人。生まれ故郷のヌエボ・レオン州の州都であるモンテレイの国際空港は彼の名前を取っている。1832 年 5 月 5 日のプエブラの戦いで頭角を現し、騎兵隊大佐、後に将軍となる。陸軍を創設し、フランスの干渉軍を破る。1867 年には、皇帝マキシミリアーノをケレタロで捕らえる。ベニー

ト・ファレス政権下で北部方面の最高司令官、後にヌエボ・レオン州等の州知事を務める。各地の市町や通りの名前に彼の名前が使用されている。

***ヘネラル・アベラルド・ロドリゲス**

General Abelardo L. Rodríguez

1889年～1967年。メキシコ北部の米国と接するティファアーナ国際空港は彼の名前を取っている。メキシコの軍人、政治家、企業家。メキシコ革命で立憲派の軍に所属。1932年から34年までメキシコの大統領代理を務める。Palacio de Bellas Artes は彼によって竣工した。その他バハカリフォルニア・ノルテ州やソノラ州の知事を歴任した。

***グスターボ・ディアス・オルダス**

Licenciado Gustavo Díaz Ordaz

1911年～70年。観光地ハリスコ州のプエルト・バジャルタ国際空港は彼の名前を取っている。1943年から46年まで下院議員、1946年から52年まで上院議員を務める。前任のロペス・マテオス大統領に次いで

大統領に就任。1968年にはメキシコ・オリンピックが開催されたが、当時学生運動が盛んで、有名な「トラテロルコの虐殺」と呼ばれる学生鎮圧の時の大統領で内務大臣は、ディアス・オルダスに次いで大統領になるルイス・エチェベリアであった。一方、ラテンアメリカでの核兵器の製造、保有、使用を禁ずる「トラテロルコ条約」は彼の治世に締結された。

***マヌエル・クレセンシオ・レホン**

Manuel Crescencio Rejón

1799年～1846年。ユカタン半島のメリダ国際空港は彼の名前を取っている。メキシコの政治家、大臣。ユカタン半島に生まれ、メリダで教育を受ける。1822年に国会議員となり、イトゥルビデ政権に反対し、自由主義、連邦主義、共和主義を擁護した。そのため何度も投獄された経験がある。1824年憲法の起草者の一人、1840年には、個人の権利の保証や人身保護令状を含む憲法案を起草した。

(10)紙幣にみるメキシコ人

メキシコは下表のように6種類の紙幣を発行しているが、独立の英雄がミゲール・イダルゴとホセ・マリア・モレロスの2人、改革（レフォルマ）の英雄ベニート・ファレス、アステカ帝国の創始者のネサワルコヨトル、植民地時代の詩人のファナ・イネス・デ・ラ・クルスとメキシコを代表する画家ディエゴ・リベラという文化人が2人となっている。うまくバランスがとれている。下記にそれぞれの簡単な紹介をつける。

券面額	人名
20ペソ	Benito Juárez
50ペソ	José María Morelos
100ペソ	Nezahualcoyotl (ネサワルコヨトル)
200ペソ	Sor Juana Inés de la Cruz
500ペソ	Diego Rivera
1000ペソ	Miguel Hidalgo y Costilla

***ベニート・ファレス**

Benito Juárez

1806年～72年。メキシコ・シティの国際空港名になっている。先住民から選ばれた最初の大統領。詳細は(9)国際空港名に見るメキシコ人の項を参照。

***ホセ・マリア・モレロス**

José María Morelos

1765年～1815年。カトリックの神父。メキシコ独立革命戦争の英雄。ミゲール・イダルゴと共に独立戦争に参加。1811年にイダルゴが処刑された後は、主導権を握り革命戦争を遂行したが、1815年にスペイン軍に捕まり処刑される。紙幣に名を連ねるほか、モレロス州、生まれ故郷のミチョアカン州バジャドリ市は、モレロスの名前を取り、モレリアと改名された。メキシコ・シティの地下鉄駅名にもなっている。

***ネサワルコヨトル**

Nezahualcoyotl

1402年～72年。ナウアトル語で「断食するコヨーテ」という意味。テスココ王の息子として生まれた王位継承者。メキシコ盆地の支配者であったアスカポツアルコを排除し、テノティティトラン、トラコパンとともにアステカ帝国を築いた。100ペソ紙幣の他に、1933年、ネサワルコヨトル賞が創設され、先住民の言語で書かれた優れた文学作品に与えられている。

***ソル・ファナ・イネス・デ・ラ・クルス**

Sor Juana Inés de la Cruz

1648年～95年。ヌエバエスパニーヤ（メキシコ）の詩人、修道女、スペイン黄金世紀の演劇作家。17歳で修道女になり、サンヘロニモ修道会サンタパウラ修道院に入る。以後、詩作に没頭し生涯を終える。代表作は、演劇「家のポーン」Los empeños de una casa、詩「最初の夢」Primer sueño、散文「アレゴリカル・ネプチューン」Neptuno alegórico。また「知への賛歌 修道女ファナの手紙」も和訳されている。

***ディエゴ・リベラ**

Diego Rivera

1886年～1957年。メキシコの画家、キュービズムの影響を受けた。メキシコ壁画運動のリーダー的存在でメキシコ絵画の代表的アーティスト。メキシコの民族的伝統と社会主義的色彩の中で、メキシコの社会、歴史、庶民生活を描いた。代表作は、ソカロ広場にある大統領官殿の「メキシコの歴史」Historia de México。1931年には、ニューヨーク近代美術館で回顧展が開催された。フリーダ・カロの夫でもあった。メキシコには「ディエゴ・リベラ壁画博物館」、「ディエゴ・リベラ・アトリエ美術館」、「ディエゴ・リベラ博物館」の3つの博物館がある。

***ミゲール・イダルゴ・イ・コステージャ**

Miguel Hidalgo y Costilla

1753年～1811年。グアダハラハラ国際空港名になっている。詳細は(9)国際空港名に見るメキシコ人の項を参照。
(連載1～4完)

桜井悌司会員は昨年、ラテンアメリカ協会のホームページに「ラテン好きのためのリベラルアーツ」と題して中南米各国縦断で12回連載されました。この連載を国別に再構成した「著名文化人・スポーツ選手等の人名録・メキシコ編」をまとめられ、アミーゴ会会員にも提供いただき、本誌で4回分割掲載しました。お楽しみ頂けましたでしょうか。なお、「メキシコ編」は同協会HPに一括アップ(<https://latin-america.jp/archives/52130>)されています。

また、メキシコ編の全体の内容は下記の通りです。

- (1)メキシコのノーベル賞受賞者：第50号掲載 (2)メキシコの著名作家・詩人：第50号掲載
- (3)メキシコの著名画家：第51号掲載 (4)メキシコの著名作曲家：第51号掲載 (5)メキシコの建築家：第52号掲載
- (6)メキシコ出身のメジャーリーガー：第52号掲載

以下(7)~(10)は第53号掲載：

- (7)メキシコの著名サッカー選手 (8)メキシコの著名ボクサー (9)国際空港に見るメキシコ人 (10)紙幣にみるメキシコ人

桜井さんは現在、ラテンアメリカ協会常務理事、NPO 法人イスパニカ文化経済交流協会理事長。1967~2008年ジェトロ勤務(メキシコ、チリ、ブラジル、スペイン、イタリアに計15年半駐在。展示事業部長、監事)。2008~15年関西外国語大学教授。<編集部>

私の本棚：会員の著作

『おんじゆく日記』～ヴァイオリンの家から～

黒沼ユリ子著。2022年12月。金曜日社。1,000円+税。



「物言うヴァイオリニスト」が東京新聞・千葉版の月一連載コラム(2014年9月~16年8月)を加筆のうえ自費出版。

黒沼会員の“吹き物言い”の結晶24本が124ページに凝縮され、平和の尊さと同時に、芸術・文化を通じて日本を「外から批判的に見る」重要性を、時に厳しく、時にユーモラスに執筆。1月15日には御宿・ヴァイオリンの家で出版記念会開催。ネット書店などを通じて購入可能。

ユリ子おばちゃんのおしゃべり絵本3部作

『あるき・にすと?アルピニスト?』

作 黒沼ユリ子・絵 大西三郎。2022年10月。富山房インターナショナル。税込1,980円。



「文字を読める喜び」を幼児に味わって欲しいと、小学校の恩師の絵とともに“ひらがな”のみで執筆された最新作。

山の上へ登ると、なぜ最高なの? 「じぶんが、じぶんに、かった〜」っていうきもちになれるからよ!自分が決めたことを一所懸命に練習し、最後までがんばれば、

てっぺんに立ったときの最高の気持ちが味わえる。人間ってすごい!さあ、好きなことに、めいっぱいほめましょ〜。

『あめさん、おみずさん、ありがと〜!』

2022年02月。富山房。税込1,980円。



突然の大雨でびしょぬれになっても「ありがと〜!」と笑顔のユリ子おばちゃん、いったいなぜ?雨がふらないと困ることを説き、水には災害をもたらす大変な力があることも忘れません。自然の恵みに感謝する心を育み、ものごとにあるバランスの意味を知る一日常の大切な気づきをもたらす一冊。

『ゆびのこと、しってる?』

2021年6月。富山房。税込1,980円。



毎日使っている“ゆび”には、どんな物語が?親指は“のみつぶしゆび”、中指は“こころゆび”……ふだん何気なく使っている指にはそれぞれ役割や名前の由来があります。指使いのプロ・ユリ子おばちゃんが“ゆび”がもつ奥深い世界へと導きます。そこでは知る喜びだけでなく、思いやりや努力、そして平和の大切さも感じ取れることでしょう。

講演：日本とメキシコをつなぐ心

「日本とメキシコ：二つの文化を一つの心で」 ～México-Japón : dos culturas, un mismo corazón～

柳沼孝一郎・神田外語大学名誉教授の最終講義が2月11日(土)12:30~14:00に Zoom で行われ、誰でも参加できます。柳沼先生にはアミーゴ会会員として講演会講師や会報投稿でご協力をいただきました。

申込：公式サイトからアミーゴ会会員として要事前予約。

<https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/news/243680/>

メキシコ映画の紹介

『母の聖戦』(LA CIVIL : 市民)

メキシコの誘拐ビジネスの闇に迫り、我が子の奪還を誓う母親の物語。センセーショナルかつ骨太な社会派ドラマ。裕福ではない庶民が犯罪組織に搾取され、警察にも取り合ってもらえない非情な現実を描く。母親は自力で娘を取り戻すことを胸に誓い、犯罪組織の調査に乗り出す…。監督はベルギーで活動するルーマニア生まれのテオドラ・アナ・ミハイ。2021年第34回東京国際映画祭審査員特別賞などを受賞。全国公開中。公式HP：<https://www.hark3.com/haha/#>

メキシコへの対内投資動向

ニアショアリング進展でメキシコ生産復活

メキシコへのアジア事業の移転が拡大している。米中貿易摩擦や感染症拡大、輸送費高騰による国際供給網の不安定化で、米墨加協定(TLCAN/USMCA)を活用しメキシコ生産品を米国に供給するモデルへの回帰だ。対墨直接投資額は2022年1~9月321億4,740万ドルと1999年来の最高額で、前年同年248億3,170万ドル比29.5%増。業種別では製造業36.3%、運輸14.5%、マスメディア13.6%、金融サービス11.6%。国別投資額は米国(含在米日系企業)39.1%、カナダ9.5%、スペイン7.1%、アルゼンチン4.9%、日本3.9%(墨経済省11月22日付)。最近事例ではVWのプエブラ自動車工場近代化事業、日本企業ではフジテックのティファナ昇降機事業買収、住江織物のグアナファト州イラプアト自動車内装材事業の新規投資などがある。(注)ニアショアリング：消費地近傍での生産・供給拠点の構築。

あとがき：恭賀新年。プリーア大使始め会員のご支援で第53号発行。2010年1月創刊以来営々と14周年。しかし編集子の右肘痛再発で風前の灯火!? 投稿記事が良薬。世は感染拡大・侵攻継続・環境破壊・成長鈍化・物価高騰・貧困増大…。不安定な時代こそ人類の知恵發揮!! 隣人と腕組みして前進。よ〜しゃヤルゾとナントカの冷水。[20230125か]